

2021-22年度クラブ会報 第4号 2021年8月4日発行

2021年7月28日 第2336回 例会報告

東京福生ロータリークラブ 山本 仁志 様 来訪



本日のプログラム

8月4日(水)

・全員クラブ協議会

次週のプログラム

8月25日(水)

・未定

2021～22年度国際ロータリー会長テーマ
奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために
RI会長 シェカール・メータ

2021～22年度東京武蔵村山ロータリークラブテーマ
クラブの未来を築くために行動しよう
第50代会長 宮崎 茂夫

・進行 内野 均 会場運営委員



・出席報告 山田 義高 会場運営委員



会員数	出席者数	出席率	前々回出席率修正
31名	24名	100%	なし

・点鐘 宮崎 茂夫 会長



本日は、緊急事態宣言下でのハイブリット例会で出席免除にも関わらず、多数の会員に対面出席頂けているのは、齊藤会員の卓話を直に聞きたくて多くの会員の方が出席頂いたものと思っております。齊藤会員、卓話、宜しくお願いします。

* 緊急事態宣言発令間の例会は全て出席扱いと、理事会にて承認されております。週報No.2、No.3の出席率は100%に修正致します。

・ニコニコBOX報告 比留間 健一 親睦委員



・斉唱「奉仕の理想」

ソングリーダー：井上 昇一 親睦委員



 **ニコニコBOX**

- * 山本仁志様(東京福生RC)⇒昨年度地区副幹事として1年間お世話になりました。
- * 宮崎茂夫会長・倉内淳幹事⇒2020～21年度地区副幹事山本様ようこそお出で下さいました。昨年はコロナ禍の1年お疲れ様でした。齊藤会員におかれましては、本日の卓話宜しくお願い致します。
- * 新海正人直前会長・田代和也直前幹事⇒「創業者・経営者の想い」齊藤会員には、昨年は再々の延期でした。待ちに待った卓話楽しみにしておりました。思いの丈をお話し下さい。出来て良かったです。
- * 荒井孝育会員⇒山本地区副幹事ようこそお越し下さいました。より一層のご指導宜しくお願い致します！
- * 嶋田哲男会員⇒皆さん、こんにちは。齊藤会員は、仕事の話となると時間を忘れてしまうので、終了5分前になったら、知らせて下さい！
- * 宮崎正巳会員⇒齊藤会員、本日の卓話よろしくお祈りします。楽しみにしています。
- * 野島征会員⇒本日は待ちに待った齊藤会員の卓話です。前評判通りか確かめに参りました。齊藤会員大変お待たせ致しました。宜しくお願い致します。

◆今回計 31,000円 累計 231,000円

・来客紹介 宮崎 茂夫 会長

- ・山本 仁志 様 東京福生ロータリークラブ (第2580地区2020～21年度地区副幹事) 昨年1年間、大変お世話になりました。



・会務報告 宮崎 茂夫 会長



○国際ロータリー人頭分担金の請求
1,108.75USD×111円
(7月レト)=123,071円

○今年度国際大会の「ヒューストン」にて「2580地区ガバナーズランチョン」を実施。

- ・ヒューストン国際大会 2022.6/4(土)～8(水)、開会式6/5(日)
- ・ガバナー主催「第2580地区ガバナーズランチョン」
- ・2022.6/5(日)12時～15時の間<昼食会>
- ・参加費用¥15,000円

○日本事務局在宅勤務延長
・8/2～8/31まで

○ZOOM講習会案内
・7/29(木)18時～20時
・8/5(木) "

*ご参加の方は事務局までお知らせください。

○ORLI第1回DL資格取得セミナー開催
・9/6(月)登録9時開始 締切8/27

・幹事報告 倉内 淳 幹事

○例会臨時変更

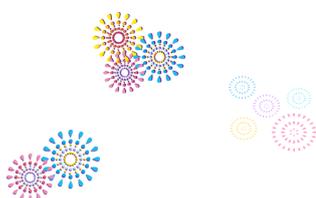
- ・東京青梅ロータリークラブ
8/3⇒例会場変更
(新町御嶽神社、弁当有)
- 8/10⇒休会
- 8/17⇒例会場変更
(新町御嶽神社、弁当有)
- 8/24⇒例会取止め(感染予防)
- 8/31⇒例会取止め(")

- ・東京東大和ロータリークラブ
8/21(土)納涼会⇒8/17通常例会

○年会員が納入がまだの方は納入の程お願い致します。



今回2回目となるハイブリッド例会



・卓話 「創業者・経営者の想い」

齊藤 孝喜 会員 <株式会社天乃屋 会長>



【歌舞伎揚と私の人生】

「よし！これなら売れる！」

後に伝説となる煎餅「歌舞伎揚」は1人の男の確信から誕生した。

その男の名は**齊藤孝喜**。

母を亡くした後、若干16歳にして裸一貫で上京。金もないコネもない、それでも心に秘めた煎餅への情熱とあくなき好奇心。

そして、たぐいまれな強運に導かれ、運命が大きく流れを変えていく。

天乃屋を設立し寝る間も惜しんで働いた日々、試行錯誤の末の歌舞伎揚げ開発、会社の躍進……。

“大きく無限に羽ばたいた”人生の軌跡

福島県会津群下郷町 그곳が私の故郷です。江戸時代の宿場町 そのままの街並みを残す大内宿や川に奇岩が並ぶ「へつり」などが有名です。私は1936年(昭和11年)3月6日に生まれました。父・荒井力雄、母・フジノは質素な理容室を営んでおり兄弟は7人で私は、その6番目でした。父は、客商売をやっているにもかかわらず、口数の少ない無愛想な人でした。母は、愛想も良く、店は母で持っているようなものでした。

父は働かないどころか父は大酒飲みで母に迷惑ばかりかけていました。

店には一升瓶を抱えてやってくるお客さんもいて昼間から酒を飲んでいました。

母は優しく物静かな人で思い返せば叱られた記憶がありません。

一方、父は怖い存在で一緒に遊んでくれた記憶はありません。

父が放蕩者でしたから家計は、火の車で家族が和やかに食卓を囲んだことはありませんでした。

兄弟の中でも長兄は私と違って勉強の出来る人で小学校・中学校・高等科では級長でした。これは、私の田舎(福島県会津群下郷町)でも初めてのことだったそうです。

兄とは年が離れていて、学校では兄と同級生だった教師が3人もいました。

その人たちも、先生になるくらいですから成績優秀でしたが兄には勝つことがなかったそうです。

兄からすれば子供は勉強するのが仕事ということかもしれませんが、私にすれば仕事は遊ぶことでしたから意見が一致するはずがありませんでした。

そんな状況でしたから、よく兄と比較されていました。

子供心に何でいつも比べられなければいけないのかと理不尽に感じていました。

少年時代、遊んでお腹を空かせて帰っても家には、あまり食べるものがありませんでした。

何か食べるものはないかなど？
気付くと、いつも、そんなことばかり考えていました。
戦時中は、食料は配給制だったので、子供が空腹を満たすおやつなどありません。
日常的な空腹感は大いにこたえました。
この時代に経験した貧困生活は一生忘れることはありません。

今、思えば、この経験が人生を変える大きなエネルギーになったのかもしれませんが。
それを思うと貴重な体験になり、一番の宝物でもあります。

そんな貧困生活の中でも母が活着ている間は少しばかりは温もりがありました。優しく母は長生きすることができませんでした。

母が亡くなって以降、父が1人で店に立っていましたが稼いだお金は一升のお米ではなく一升の「どぶろく」に化けてしまうというありさまでした。

筆記用具すら買えず、学校に行っても満足に勉強することも出来ず見かねた先生が、わら半紙でノートを作ってくれたのを、今でも記憶しています。

また、昼休みになると「弁当を忘れたので家で食べてきます」と先生に言って帰っても家には食べるものではなく空腹のまま学校に戻るのですが、クラスメートに、お腹がいっぱいだという演技をするのが嫌でした。

もう、貧乏生活はしたくない！苦勞してでも仕事をすればお金が貰えるんだ！

私は心の中でそう叫んで、空腹を少しでも忘れようとしていたのです。

ある時、友達が「将来は何をするんだい？」と言われ何も考えず「父親の後を継いで床屋をやるよ」と何も考えずに答えると「君は背が低いから床屋は無理じゃないか」と言われました。

私は、身長も小さくお客さんの頭まで届かず、調髪をすることが難しいことが分かりました。

それ以上に田舎では、男の人が主人の理容室は父の店や近隣をみても、あまり繁盛してないことが分かりました。

その時点で理容室を継ぐのをあきらめました。
実は父から中学卒業後は猪苗代街の理容室で働くように言われてましたが、どうしたら良いのか迷ってました。

これは都合良く家を出られるということに気づいたので、家を出て働けるんだという期待感が沸いてきました。

猪苗代町行きこそチャンスと思い以前から、東京に行ってみた、仕事をすれば東京が良いだろうと漠然と考えていましたので中学卒業後の4月に着替えて母と一緒に写った写真を持って駅まで行き下郷町から猪苗代までの切符を買い、朝一番の汽車に乗りました。

心の中には、これから東京に行くんだという大きな希望と、それ以上に大きな不安を抱えていました。

上野駅に着き、何も考えず東京に来てしまったので、これからどうしようかと考え、煎餅屋を営んでいる親戚のおじさんの所へ行くことにしました。

働くんだという固い決意は忘れていませんでしたが、いざ東京に来てしまうと中学校しか出てない自分に仕事があるのかと苦悶と葛藤の日々が続いてましたが、そうかと言ってただご飯を食べさせてもらうわけにも行かないので、親戚のおじさんの仕事を手伝うことにしました。

そして、仕事も覚え始めた頃、甘納豆の製造・卸しを営んでいる社長と出会い、それがきっかけで甘納豆の小売店への卸しの仕事を自分で始めることになったので、ようやく自分で商売を始める所まで来たのです。

「お金を稼ぎたい！」という大きな夢への第一歩を踏み出すことができ、仕事に熱が入り欲も出てきました。ある人から「ヤミ米をやると儲かるよと聞きブローカーから米を買い必要としている人に売って回りました。すると倍々ゲームでお金が増えて味をしめてヤミ米売買に傾注していきましたが、そんな、ある日、警察に捕まりヤミ米を没収されたらと焦りだし切羽詰まった私は警察署の前にあった選挙中のポスターを覚えていたので「先生」呼んでくれると警察官に言いました。

警察官は学校の先生と問いかけてきましたが、違うよ、あの先生と言って知りもしない警察署の前に貼ってあったポスターの代議士先生と言いました。

ポスターの代議士先生に警察官が連絡を取ったようで、代議士の秘書が来てくれました。

本当に来てくれるとは思ってなかったので、かなり驚きました。

私は秘書の人に、お金がなくて学校に行けないから、こういうをしていると事情を説明しました。

そのことを警察に説明してくれて無罪放免、ヤミ米も返してくれました。

秘書の方とは「二度とやらない」と約束しましたが、結局その後もヤミ米売りが、いなくなるまで売買を一年間ほど続けました。

甘納豆を買いに足繁く通う内に、同業者の中に「天乃屋」を一緒に背負っていく齊藤龍雄氏がいました。



創業70年に向けて、天乃屋の福島

矢吹工場が2020年5月より本格稼働



最先端の米菓工場は
魅力創造の拠点！

敷地面積
49,775㎡ (約15,000坪)

法人床面積
13,794㎡ (11722平方尺、4,180坪)

株式会社天乃屋 www.e-amanoya.co.jp/

〒965-0801 福島県福島市大町1-1-1

電話 0249-241-1111

ファックス 0249-241-1112

代表取締役 齊藤龍雄

創業 1950年



天乃屋
東京工場
直売店

その頃、私は10代後半で、齊藤龍雄氏とは23歳も年の差がありましたが自分が一生懸命仕事に打ち込んでる姿を見て感じるどころがあったのかもしれない。

ある時、こんなことを言ってきました。「卸し・小売りだけでは儲からない時が来るから、一緒に製造をやらないか？」と言われました。よく考えた末に昭和28年(1953年)7月一緒に甘納豆の製造・卸しを手掛けることにしました。社名を「有限会社天乃屋」としました。製造から手掛けると言っても味を安定的にするのに試行錯誤の連続でした。

朝から昼まで甘納豆を製造して午後は自転車で売りに行きました。今の私があるのは、甘納豆屋時代の天乃屋があったからかもしれません。昭和29年夏場に売れ行きが下がり、売り上げを上げる良い方法はないかと次の策を考えていました。ある朝、散歩していると路地裏から良い匂いがしてきたので、近くにいた従業員に何をつっているのか聞いてみると揚げ煎餅をつくっているというので、「揚げ煎餅は売れるのか？」聞くと「売れるからつくっている」と当たり前返事が返ってきました。煎餅屋で働いていましたが、それまでは特に心引かれることはありませんでしたが、しかし、その時は、なぜか揚げ煎餅に強く惹かれ甘納豆の次は、これしかない、直感しました。

試行錯誤の上に昭和29年(1954年)秋に「揚げ小丸」という商品を販売しました。「揚げ小丸」は好評で納得の出来る売り上げを残すことが出来ましたが、まだ味付けに満足がいきませんでした。私の中には「少しでも他よりおいしいものをつくらう」という思いが強くあり、甘納豆を製造していた経験から試行錯誤し、ついに自分でも納得が出来る揚げ煎餅が完成しました。

この時には、まだ名前がありませんでした。満足出来る味となったこの揚げ煎餅にふさわしい名前は無いかと頭をひねり思案する中で、消費者に伝統ある煎餅にふさわしい味であると認識してもらおうと伝統あるものを想起させる商品名が良いのではと思い、古典演劇である「歌舞伎」をくっつけた名前は出来ないかと考えている内に、単純に二つを合体させた「歌舞伎揚」という名前が浮かびました。ただし、手間暇を掛けた商品でしたから他の揚げ煎餅よりも割高になることは分かっていました。当時の揚げ煎餅より材料費、人件費を考えると3割ほどアップしてしまいました。

小売店に何でそんなに高いのと言われましたが「食べてもらえば違いが分かります！」と熱心に説明して「置けば必ず売れます！」と強く訴えたこともあります。



自分が信じている商品だけに値引きする気がありませんでした。

その結果、私の思い通りの売り上げになりました。これには、本当に売れて良かったと胸をなでおろしました。

今、思えば他の揚げ煎餅と同じ値段にしていたら、利益が出ないので50年以上続くことは無かったと思います。

今では工場3ヶ所 従業員480人、海外へも輸出しています。

16歳で上京して「歌舞伎揚」を世に出したころには、私も20代半ばとなっていたのですが、無我夢中で働いていたので女性には縁がありませんでした。以前、齊藤龍雄氏から娘を嫁にして欲しいと言われたこともありましたが、当時、齊藤龍雄氏の家に一緒に住んでおり兄と妹のような関係で結婚なんて考えたこともありませんでしたが、高校を卒業する年頃になって美しく、成長した彼女に恋心が芽生えてきて卒業式を終えて帰ってきた、その晩にプロポーズをしました。そして、その年の昭和43年(1968年)10月に結婚式を挙げ、私は齊藤孝喜になりました。

本日は、時間切れになってしまったので来年、福島工場見学の時に続編をお話したいと思います。私の書籍が後方に置いてありますので興味のある方は読んで下さい。



天乃屋 福島矢吹工場

・閉会の点鐘 宮崎 茂夫 会長



◇ 創立 1972年7月8日 ◇ 承認 1972年7月20日
◇ スポンサークラブ 東京立川ロータリークラブ
◎ 会長 宮崎 茂夫 ◎ 幹事 倉内 淳
○ 副会長 比留間一義 ○ 副事 荒井 孝育
□ クラブ会報委員長 波多野晃夫 副委員長 佐藤 貢
委員 比留間重次、比留間孝司、比留間一義

東京武蔵村山ロータリークラブ
事務局/例会場 西武信用金庫村山支店2階
〒208-0004東京都武蔵村山市本町2丁目91-1
TEL:042-520-3251/FAX:042-520-3252
Eメール:t-mmrc@crest.ocn.ne.jp
●例会日:毎週水曜日 12:30~13:30